

空には日々さまざまな種類の雲が浮かんでいます。これから迎える盛夏では、青空にもくもく湧きあがる積乱雲が、まさに季節を代表する雲でしょう。

ところで、雲の分類はどのようになっているのでしょうか。

雲の種類は、発生高度と大まかな形から十種に分類されています。雲のできる対流圏を3層に分け、まず下層では積雲・積乱雲・層雲・層積雲に、中層では高積雲・高層雲・乱層雲に、そして上層は巻雲・巻積雲・巻層雲というふうに分類しています。

出現高度はそれぞれ地表～2 km、2～7 km、5～13 kmで、発生原因はさまざまですが、名前のつけ方は一定のルールに従っています。

「積」「層」「乱」などの文字が使われていますが、これは形状と性質を現し「積」は対流によって上方に伸びた様子を、「層」は広範囲に横に広がっている様子を現しています。「乱」は雨をもたらす雲です。これらの文字から、その雲の素性が分かり、例えば乱層雲なら温暖前線の接近時にみられる「中層に広がった雨を降らせる雲」ということになります。また積乱雲なら、日中の日射などで激しい対流が起き「上方に発達した雨を降らせる雲」となります。

気象庁では、世界気象機関の定める分類により、この十種をさらに雲の状態により各層で10の型に分けて観測し、国際交換の資料として通報しています。一例ですが「雲頂が明らかに巻雲状をなし、多くはかなとこ状を呈している積乱雲のある状態」なら、下層雲の状態は9型の積乱雲ということになります。

空に浮かぶ雲を見る際、ここまで細かな事は必要ありませんが、意識して観察していれば、十種類の雲の見分けもできるようになります。

突然の雷雨など、天気急変を察知するためにも雲の観察は有効ですし、その日朝に見た天気図と組み合わせれば、これから起きる現象の予測もつく場合もあります。雲を知ることは、一番簡単な天気予報といえるかもしれません。

# 十種雲形

気象庁地上気象観測資料より

	雲形	学術名	通称	特徴
上層雲	巻雲 Ci	Cirrus	すじくも	繊維状をした繊細な離ればなれの雲で、一般に白色で羽毛状かき形、直線状の形となることが多い。また、絹のような光沢を持っている。
	巻積雲 Cc	Cirrocumulus	うろこくも いわしぐも さばくも	小さい白色の片(部分的には繊維構造が見えることもある)が群をなし、うろこ状又はさざ波状の形をなした雲で、陰影はなく一般に白色に見える場合が多い。
	巻層雲 Cs	Cirrostratus	うすくも	薄い白っぽいベールのような層状の雲で陰影はなく、全天をおおうことが多く、普通、日のかさ・月のかさ現象を生ずる。
中層雲	高積雲 Ac	Alto cumulus	ひつじくも	小さなかたまりが群をなし、斑状又は散本の並んだ帯状の雲で、一般に白色又は灰色で普通陰がある。雲片は部分的に毛状をしていることもある。
	高層雲 As	Altostratus	おぼろくも	灰色の層状の雲で、全天をおおうことが多く、厚い巻層雲に似ているが日のかさ・月のかさ現象を生じない。
	乱層雲 Ns	Nimbostratus	あまくも ぬきくも	ほとんど一様でむらの少ない暗灰色の層状の雲で、全天をおおい雨又は雪を降らせることが多い。この雲のいずれの部分も太陽を隠してしまうほど厚い。低いちぎれ雲がこの雲の下に発生することが多い。
下層雲	層積雲 Sc	Stratocumulus	うねくも	大きなかたまりが群をなし、層又は斑状・ロール状となっている雲で、白色又は灰色に見えることが多い。この雲には毛状の外観はない。
	層雲 St	Stratus	ぎりくも	灰色の一律な層の雲で霧に似ている。不規則にちぎれている場合もある。霖雨・細氷・霧雪が降ることがある。この雲を通して太陽が見えるときはその輪郭がハッキリ判る。
	積雲 Cu	Cumulus	わたくも	垂直に発達した離ればなれの厚い雲で、その上面はドームの形をして隆起しているが、底はほとんど水平である。この雲に光が射す場合は明暗の対照が強い。積雲はちぎれた形の雲片になっていることがある。
	積乱雲 Cb	Cumulonimbus	にゅうどうくも	垂直に著しく発達している塊状の雲で、その雲頂は山又は塔の形をして立ち上がっている。少なくとも雲頂の一部は輪郭がぼつれるか又は毛状の構造をしていて普通平たくなっていることが多い。この雲の底は非常に暗く、その下にちぎれた低い雲を伴い、普通雷電、強いしゅう雨・しゅう雪・ひょう及び突風を伴うことが多い。